

第5章

石川先生 あ・ら・か・る・と

5.1 ゴ ル フ

「ゴルフはQCではないよ、勘だよ」

河 合 良 一

私は五十余年の間、先生には公私にわたって大変お世話になりました。初めは高等学校の友達として、社会に出てからは品質管理の先生として親しくお付き合いさせていただき、多くのことを学びましたが、それに加えて先生のお人柄に触れる機会がたくさんあり、それが多くの楽しい思い出になっています。

既に30年も昔のことになりますが、当社は初めて国際的な自由競争の波にさらされ、まさに浮沈の際に立たされました。そして、これを乗り切る手段としてQCを導入しようということになり、先生のもとにお願いに参上しました。先生には6カ月先のスケジュールまで満杯の状況でありましたが、「先生が工場や営業所へ指導に行く際には必ず私も同行すること」が守れるなら引き受けましようと言われたので、「もちろん同行しましょう」ということでお引き受けいただきました。

しかし、これを実行することは私にとってはとても大変なことでありました。こうしてひんばんに現場に行くようになってからは、それまで幹部から報告のあった工場、営業所の姿とは一味違った、生きた情報が得られ、真の実態を把握することができるようになり、目を開かれた思いがしたものでした。このことは経営的に正しい判断をする上で極めて重要なことで、経営者としてのあるべき姿、とるべき道を教えられた思いがしました。また、先生はご指導にこられるとその都度、当社の仕事のやり方がいかに非科学的、非合理的であるかということを徹底して指摘されました。しかし一方、社外の人に対しては当社の良い点を多々披露されるらしく、そうしたお話が自然にこちらに聞こえてきて、また元気付けられるといったことがよくありました。先生の暖かいお人柄が偲ばれます。

そんなある日、先生と私は箱根にゴルフに出掛けました。普段はやりこめられてばかりいますが、ゴルフなら私のほうが先輩だと思い、いいところを見せようと張り切りすぎたのでしょうか、ボールが左右にぶれてスコアが崩れてしまい、模範を示すどころではありません。しかし、先生のほうは私以上に右に左にと自由奔放なゴルフをされていました。そこで早速、「先生のゴルフは全くQC的ではありませんね」とひやかしました。すると先生は「ゴルフはQCではないよ。勘だよ」とおっしゃってすましていました。世界的なQCの権威者もご多忙の余り、ご自分のゴルフにまではQCの応用が及ばなかったということでしょうか。

あれから30年、当社も国際企業のひとつに数えられるようになりましたが、その陰には先生の親身で献身的なご指導があったことを終生忘れることができません。

産業界に深い愛情を抱き、情熱をもってお導き下さいました石川先生がおられなくなったことは淋しいかぎりではありますが、先生のご遺志を引き継ぎ、日本の産業界をさらに発展させるための努力を重ねることが、先生に対するわれわれの責務だと決意を新たにしている次第です。（小松製作所取締役会長）

偉大な統率者 石川 馨先生

内 山 真 人

QCG とは QC と GOLF との合成語で、石川先生の旗振りの下に 1959 年以来連綿として 30 余年続けられているデミング賞受賞会社幹部のゴルフコンペであります。私も 1981 年の受賞後お仲間に入れて頂いたのですが、そのお陰でいつしか多くの QC 友人（何れも会社幹部の方々）が出来ました結果、各種の QC 関係会合にも楽しく出席出来るようになりました。若し私が QCG に参加していなかったら現役引退と共に QC とも疎遠になっていたでしょうが、今尚 QC が私の人生に生きているのは、QCG を通じて得られた交友関係に負うところ大なるを感じざるを得ません。QCG に秘められた先生の狙いの品質はその辺にあったのかを示すかのように先生は QCG を大切にされました。

忘れもしません。時は平成元年 2 月 25 日の QCG の当日、朝来の吹き降りで最悪の天候でした。プレー後のパーティー席にご病気のため一年余休んでおられた先生が突然お見えになりました。一同大喜びで祝杯を上げ、一座大いに盛り上ったのですが、それが先生最後の QCG となりました。

先生の比類ないご業績の中でも QC サークルは一段と不滅の光彩を放つものでありましょう。私はかつてその関東支部長を務め各地大会に出席致しましたが、其所では参加各社から派遣された若人が和気藹々と協力して大会を運営し親交を深めつつ日頃の研鑽結果を発表し合うのを見て深い感銘を覚えました。若し QC サークル活動無かりせば今日世界に冠たる日本工業製品は果してあり得たでしょうか。最後の年までご病苦をおして指導激励のため壇上まで上がった先生のご英姿は忘れられません。

QCG と QC サークルは形こそ違え、このユニークな二つの活動を通じて QC を志す人々の大同団結を促し QC 発展に邁進せしめた先生は、実に偉大な統率者でいらっしやうと申し上げるべきでありましょう。（JUKI 顧問）

ホールインワン

石 川 哲

父が念願のホールインワンをしたのは、156回 QCG(JSA 杯)で、1985年6月15日(土)1時30分東名御殿場カントリークラブ14番ホール、パー3、131メートル、7番ウッド(ダイワユニカーボ)、ボールはレクスターADの4番、キャディーさんは斉藤美恵子さんでした。関谷節郎氏(トヨタ自動車)、入野克彦氏(鹿島建設)、光明春子氏(日科技連出版社)の3氏が同伴プレーヤーでした。この時の写真を見ると当時69歳であった父の顔、ツヤも良く、本当に楽しそうでした。

父がゴルフを始めたのは、1957年、44歳の時でした。父の性格を物語るようにデータを取り(練習に生きたかは疑問が残るが)家の庭のネットでは、日が暮れるまで練習をしていたのが良く思い出されます。その練習のかがあってか父のハンディキャップは59年～65年にかけメキメキと上達しました。1959年のQCGのハンディキャップが36であるのに対して、1965年の高坂C.C.では19にまでなっていました。この19が、父のゴルフ歴中ベストハンディキャップとなりました。ゴルフを始めて6年、50歳の時です。個性的なスイングを練習量でカバーした努力の賜物です。

この50歳～60歳にかけて、父はかかさずQCGに出席していました。QCGのあった日は帰宅しますと、その日のスコアー、皆さんの新ハンディ等々を記録・レポートを書くことが父の楽しみでした。私も大学生のころから、色々手伝わされました。

その父も60歳で大病をし、手術をした後は2～3年ゴルフの回数も減り用心していました。昔から肺が弱かったこともあり、特に暑い時のゴルフにタオルは欠かせない道具でした。年を追うごとにゴルフクラブを杖のようにして歩くことが多くなりました。1984年頃から寒い時良くゴルフをしていたのも、このような体力のせいであったのでしょうか。夏は軽井沢でのみゴルフをし、それで

も汗をフキフキでした。父のタオルは絞ると汗がしたたり落ちるほどであったのは、皆さんもご存知であったと思います。

父の記念のゴルフボールは、父が他界した際父のそばに入れて持っていったもらいました。今ごろ天国でホールインワンの自慢話をしているかも知れません。

(次男 エイム社長)

ホールインワンの時のスコア

BENT GREEN

Competition 156回 (JSA杯) GCG

HOLE NO.	HCP	BACK TEE	PAR	REGUL. TEE	石	内	入	光
1	3	498	5	483	6	1	8	6
2	1	405	4	383	6	1	6	9
3	5	492	5	477	8	2	5	5
4	7	380	4	365	5	1	5	10
5	13	321	4	301	6	2	4	6
6	17	297	4	282	6	3	6	6
7	15	150	3	138	4	2	4	5
8	11	186	3	166	5	2	4	4
9	9	350	4	332	4	3	7	7
OUT		3,079	36	2,927	53	17	49	58

(自署) Competitor 石 川 馨

(確認者) Attested by 東名 街 駐 臨 カントリークラブ

(月日) Date 1985年 6月 15日 12時 30分

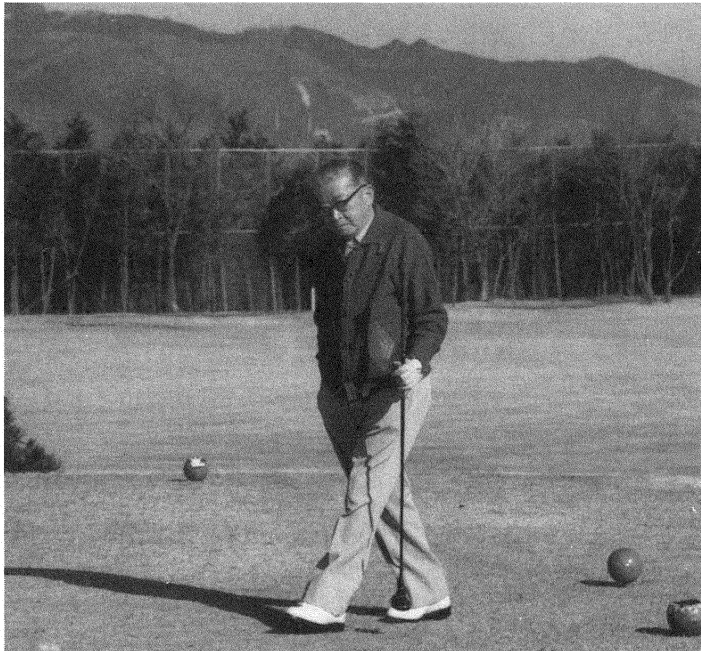
Round 生年月日 MTS 年 月 日

HOLE NO.	HCP	BACK TEE	PAR	REGUL. TEE	石	内	入	光
10	8	330	4	308	7	3	4	5
11	6	342	4	332	5	1	5	6
12	2	338	4	322	7	3	5	7
13	10	323	4	323	6	2	4	6
14	14	145	3	131	3	3	4	6
15	12	298	4	279	10	2	7	8
16	18	118	3	104	6	2	2	3
17	16	302	4	287	9	2	4	6
18	4	495	5	461	7	3	6	9
IN		2,689	35	2,547	58	40	54	59
OUT		3,079	36	2,927				
TOTAL		5,768	71	5,474				
HANDICAP <u>Hole in One</u>								
NET								

ホールインワンの前4ホール パー16を25 9ストロークオーバー
 ホールインワンの後4ホール パー16を32 16ストロークオーバー
 オヤジもやはりホールインワンで動揺したようです。

ハンディキャップの推移

QCG ハンディ		オフィシャル・ハンディ	
1959. 2. 1	36	1959.12.	31 府中 C. C.
2.	34	1960. 1.	30 武蔵 C. C.
3.28	32	5. 7	30 府中 C. C.
7.20	26	1961. 5.18	27 武蔵 C. C.
1960. 1.22	21	↓	
7.28	19	8. 8	23
9.30	17	各クラブハンディ修正で+ 3 され	
1961. 4.15	14	1962.12.	26 武蔵 C. C.
6.16	13		
+ 6			
12. 1	19		
1962.	17	1963.11.	25 府中 C. C.
1964.	15	1964. 7.	21 旧軽井沢 C. C.
1965.	12	1965.11.	19 高坂 C. C.



軽井沢にてゴルフを楽しむ(1983 年 1 月)

石川先生のゴルフの管理グラフ

奥 野 忠 一

石川先生は何事に依らずよくデータをとって保存されていたと聞きますが、次ページのグラフは先生のゴルフの成績の記録です。先生は1970年頃までは年に35回程度プレーをしておられますが、その各ホールごとのスコアを克明に管理グラフに打点しておられます。ホールはパーが5, 4, 3のロング, ミドル, ショートに分かれるからスコアそのものを打点したのでは意味がありません。先生は特性値としてパーからいくつオーバーしたかの数値で管理しておられます(図1)。この値がゼロならパーで上がったことになり、+2ならダブルボギーである。残念ながら先生のゴルフの腕前では-1というバーディはほとんど見られません。しかし、先生の名誉のために付言するとQCG(QCゴルフ会)コンペ30年の歴史でホールインワンをされたのは先生ただ1人です。

このグラフは1957年から始まっており、1968年で終わっていて、折り畳んで18枚程になっています。ゴルフから帰るといつもこういう整理をしておられたと聞きますが、その後はお忙しくてお書きになっていないのかもしれませんが。

図2は、図1を要約したグラフで、●印はワンハーフ9ホールごとに1ホール当りオーバー数の平均を、×印はそこでのパット数の平均を示しています。図2の2つのグラフを比較してわかることは、ゴルフを始められた1957~58年頃はかなりバラツキが大きくスコアも悪かったようですが、10年も経たないうちに管理状態になって平均は2.0オーバー位ですが、どのホールでも4以上になるようなことはまずありません。われわれには「ゴルフはQCではないよ、バラツキがある方が先が楽しみだよ」と慰めて下さっていましたが、先生自身はちゃんとQC手法を使って、ご自分のゴルフの腕前も管理しておられたことがこのグラフからわかり、敬服するばかりです。

(東京理科大学理事・教授 工学部経営工学科)

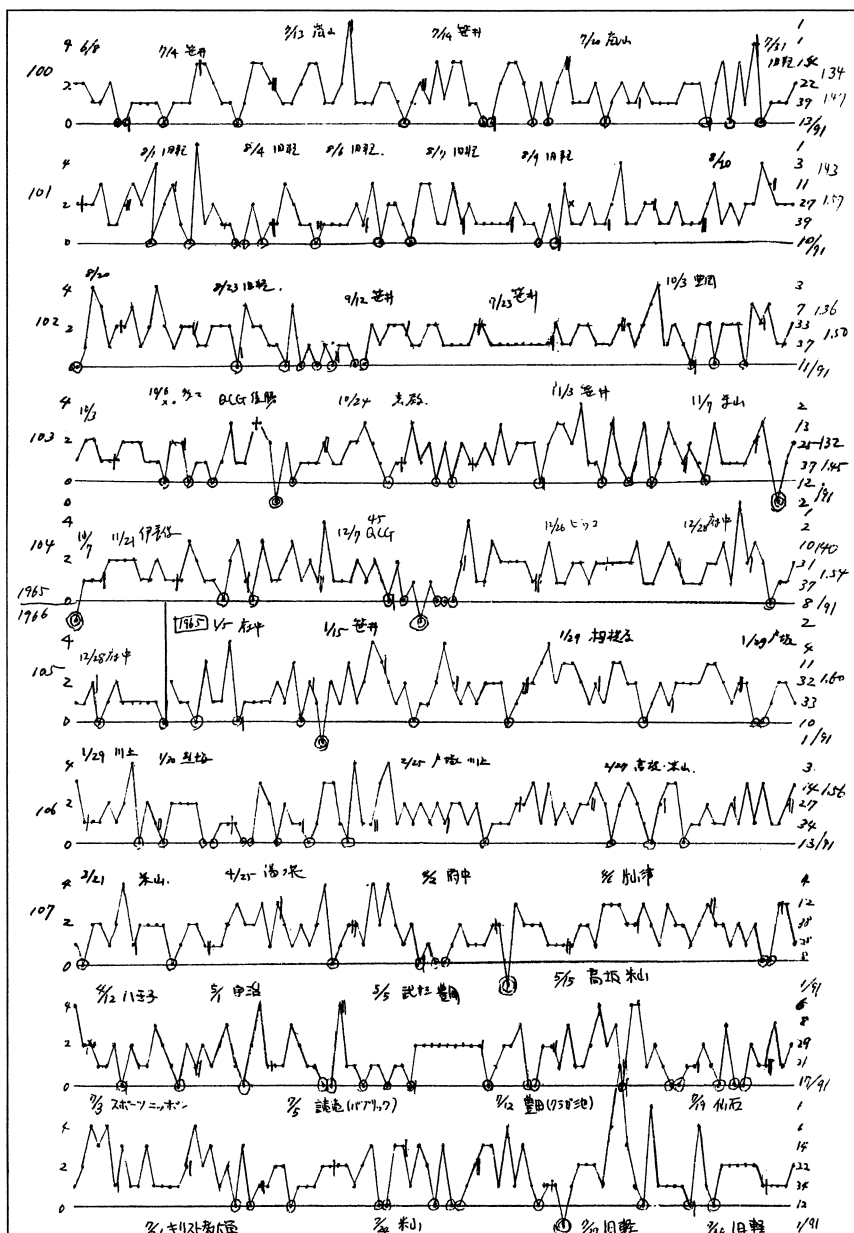


図1 各ホールごとのオーバー数 (1965~66年)
(1日に18または27ホールまわっている)

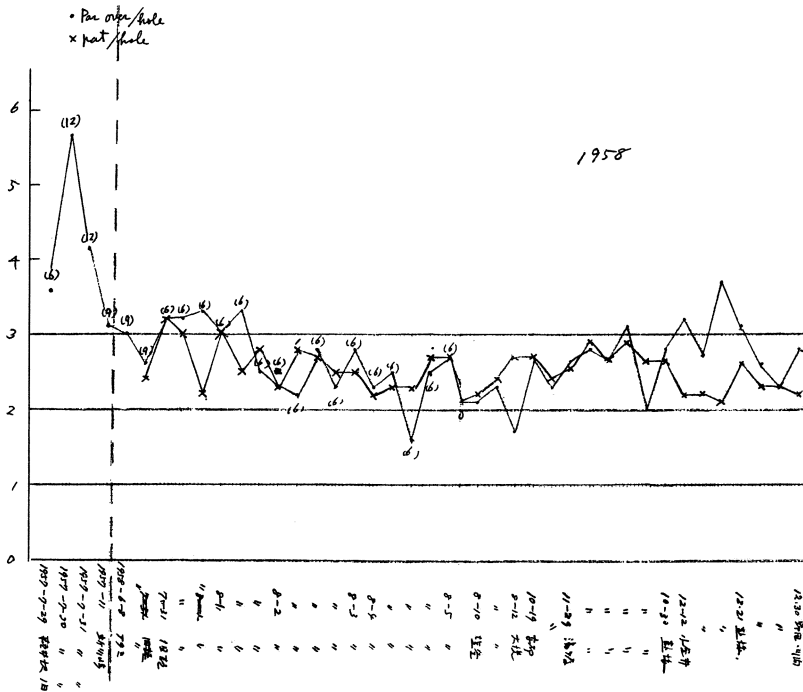


図 2-1 1957~58 年の平均オーバー数とパット数

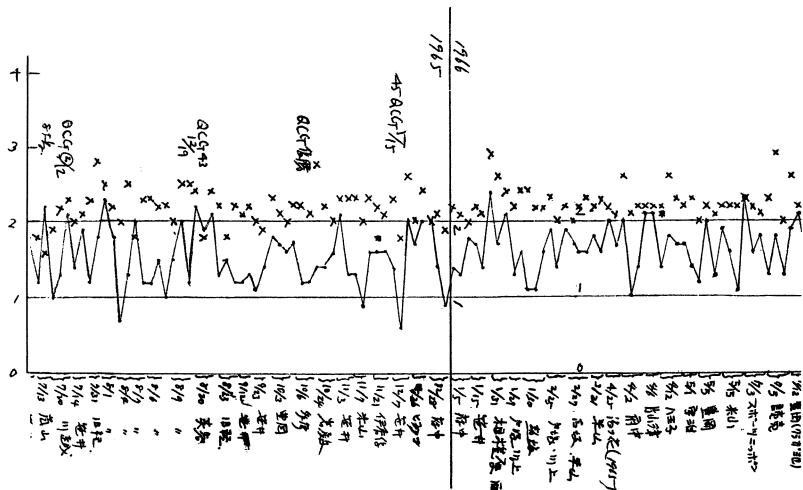


図 2-2 1965~66 年の平均オーバー数とパット数

5.2 ノムニケーションの由来

ノムニケーションの由来は、先生が主任講師をされていた国際連合工業開発機関(UNIDO)主催の“工業製品の品質改善コース”(海外技術者研修協会, AOTS 実施)の1978年のシンガポールからの研修生 Anthony Hoon 氏(彼は、当時、横河電機シンガポールに勤めており、日本語が少し分かった)が諏訪の三協精機での研修期間中に、夜、いわゆる“赤提灯”に行き、耳に入ってくる客の会話のほとんどが昼間の会社の仕事に関連した内容で、しかも飲み代は会社持ちではなくて自分持ちと聞き、大変驚き、飲む [nomu] ことによりコミュニケーション [communication] をはかるということで、ノムニケーション nomunication なる新語を作ったのが始まりで、彼は日本的経営の基礎はこのノムニケーションにあるということを主張しました。このことが石川先生の耳に入り、先生はこよなくこの言葉を愛好され、石川先生の口を通して日本全体に広まることになりました。

石川さん、5時ですよ

隅 田 武 紀

私たちが本郷に進んだ頃は石油化学の技術導入が一段落し KNOW-HOW より KNOW-WHY ということで化学企業が一斉に中央研究所を設立し、これに呼応して東大応用化学科の定員が倍増され4学科に改組された時代でした。

大学院への進学率が急増したのもこの頃で、卒業論文で石川研に進んだ同期5名も全員が修士課程に進みました。学部4年、修士1年、2年と多士済済フルハウスでその若衆頭が博士コースにおられた久米さん、現在石川研を継いでおられる久米教授でした。今から思えば当時は石川先生も安東新午教授の研究室より独立されて間もない新進気鋭の教授であったわけで、とにかくそのパイタ

リティー溢れる仕事ぶりには常に若い者の方が舌を巻いていました。日科技連を通じての企業社会への品質管理の教育・普及が大事なお仕事の一つでしたが、学生達にも積極的にその手伝いをさせ、そういった体験を通して品質管理とは何であるのか体得させようとされていました。

セミナーの書記や講師をし、また問題集や教科書を作り、さらに各種研究会や研修会に参加させて戴きましたが、当時の学生には贅沢な伊豆や箱根のホテルで開かれることもしばしばありました。こういう時には夜は大広間で講師の先生がたの宴会になるのですが、みなさん大変お酒が強かったように思います。石川先生も酒豪であられ、日本酒の場合はすぐにコップを用意させ徳利からなみなみと注いでから始められるのを常としており、みんなのお酌を、にこにこ顔で、次から次へとコップに受けてとどまるのを知らずという有様でした。宴たけなわともなりますと、あちこちにグループができ侃侃諤諤議論が続くことになりますが、一番大きなグループのまん中で大きな声でお話になっているのが石川先生でした。夜も更けて1人2人と部屋に引き上げ始めころあいになると、俺の部屋に來いということで学生たちはみんな先生の部屋に押しかけて、石川先生ご愛用のパンパンにふくれた鞆から取り出されたトリスの瓶が空になるまで議論を続けるのがお決まりのコースでした。“トリスを飲んでハワイへ行こう”という開高健のコピーが大ヒットしていた時代でしたが、私たちの1年先輩たちが先生のお宅でご馳走になった際、先生のいたずらで当時貴重品であったジョニーウォーカーの瓶に入れられたトリスをそれと知らずに大感激して飲んだこともあり、瓶の中味はついにトリスかどうかわからなかったと思います。このにせウイスキー感激事件は品質管理の講義で官能検査の部の格好のエピソードとなりました。

石川先生はお酒がまわっていい気分になられると二人称が貴様となり、研究の仕方、仕事に対する心構え、とくに企業に入った場合上役を使えなければ駄目だというようなことを熱心に話されましたが、たまには学生の質問に乗って海軍での青春時代に芸者さんたちにもてた話も聞かせていただきました。先生が大変好んで話されたのは、“石川さん、5時ですよ。”という話でした。先生達が、芸者さんとともに飲んで酔いつぶれて寝込んでしまっても、必ずお姐さ

んたちが、翌朝、窓越しに起こしに来てくれたので、朝の点呼に遅れずに済んだということで、先生達のグループがいかにもてたかということを自慢されたかったのだと思います。

にせウイスキー事件の話が先になってしまいましたが、先生には毎年新年には研究室全員を調布のご自宅に招待していただき、手料理でなければもてなしにならないとの家風を受け継がれた奥様の手料理をご馳走になりました。飛田給駅のすぐそばから石川農場が広がっていて当時すでに珍しかった藁葺の母屋にお住まいだったと思います。お子様達も話に加わって戴き、お嬢さんに上手なピアノを聞かせていただいたこと、久米さんが意外にも野ばらをひかれたことなどを思い出します。そんな折、石川先生の米国出張の記念アルバムを見せいただきましたが、米国についたその日から帰るまで毎日奥様宛に絵はがきをだされているのには驚かされました。先生はちょっと照れながら日記がわりにこの方が便利なんだよとおっしゃっていましたが、豪放磊落な先生の別の一面をみるおもいでした。

(1964 年学部 66 年修士卒)

5.3 ヘビースモーカー

石川先生の「うっふっふっ」

永 岡 義 久

1988 年 4 月 16 日土曜日。都心のホテルで、東京電力の TQC 推進ステアリングコミティ、所謂ステコンが開かれました。

この年、九段の桜は例年の如く真っ盛りでしたが、推進室長としての小生の頭は、将に「脳死寸前のフル回転」状態にありました。

斯界の大物指導講師陣の総括役としての石川先生「急遽ご入院」の情報をキャッチしており、予定通り進めるか否かの岐路に立たされていたところ、前日 13 時 20 分、S 病院の病床から「出席するので予定通り開催するように」との先

生直々のお電話を頂き、「ほっ」とすると共に、果たしてそのようなことをして頂いてよいものか否かの不安と心痛を抱え込んでいたからです。

しかしながら、当日の先生は、とても病床から出席されたとは思えない、ダイナミックな力強い司会進行ぶりです。4時間余りをとり仕切れ、「少しでも早く楽しいTQCに」とのコメントでステコンを結ばれました。

引き続きの懇親会は流石に「ボクは遠慮する」と帰院される先生をお車までご案内した時の先生とのやりとりは、小生にとって終生忘れられないものとなりました。

フロントロビーで、突然足を止められた先生は一枚のお札を差し出されながら、「キミ、たのむよ」

「はあ？」怪訝な面持ちとなった小生も、先生の手が煙草の自販機を指しているのを見て、咄嗟にその意味を了解しました。

「ええっ、ドクターストップでしょう？」

まことに苦がい、厳しい表情の先生。

「うぬ、いや、いいんだ、早く！」

「まずいなあ」と呟きながら、会議中も喫っておられたし、一箱位は……と「コトリ」と落ちてきた一箱とお釣りを先生の方に差し出しましたが、先生は箱の方しかお受け取りになりません。

「いや、全部だ、ゼンプ早く！」

一瞬、端正な蕙子夫人の眉を顰めるご様子が脳裏を過ぎりました。

「奥様に叱られますよ」

「うっ、ううん、いいから、早く！」

そのお顔は仁王さまか金剛力士像さながらの駄々っ子。

「コトリ」「コトリ」「コトリ」

「ウン、ありがと。うっふっふ」

この「うっふっふ」は、「全てを含む無」とでも言うべき、いわば、横山大観の畢生の名作「無我」の童子そのもののお顔でした。

それから丁度1年後の4月16日が、奇しくも石川先生のご命日となりました。

(東京電力東電学園研修部担当理事)

タバコ願います

草 場 則 子

“これは何ですか？”

巻きスカートに安全ピンがわりにつけたリスのブローチをご覧になって石川先生がお尋ねになりました。あれは私が勤め始めて間もない、ある小春日和のことでした。

「これお家へ持って帰ってお母さんとお上がりなさい」

「これは、今度出た新製品だけとお母さんの分とあなたの分と。使ってみて感想を聞かせて下さい」

日本鋼管（現 NKK）に勤務していた父は私が高校生のときに急逝しました。

ピンポン。玄関のチャイムが鳴りギブスをはめた重い足でかけつける(?)と、恰幅のよい人影がすりガラスに写っていました。「これから台湾に出かけるところなんだけど、途中でちょっと寄ってみたのよ。足の具合はどお？」アキレス腱切断で自宅療養中に、先生はお忙しいのにもかかわらず二度もお見舞い下さり、完治するまで療養なさいと、運転手さんに頼んでタイプライターを運び、自宅で仕事出来るようにして下さいました。

他人に対しては大変おやさしかった先生ですが、大腸ポリープの手術をなさって間もない大学の入学試験の初日に、手術前にお決めになったご予約通りに病院からご出勤になったのでした。

タバコ願います。赤インクで書かれた小さなメモ用紙。

愛煙家の先生が、買い置きのタバコがなくなると、私の机の上に置いておかれたメモです。不用になった今もなぜか捨てられずに残っています。

（元武蔵工業大学学長室秘書）

5.4 重いカバン

石川先生のカバン

山 岡 建 夫

石川先生に親しくご指導を頂くようになったのは、当社が1976年に品質管理を導入して以来のことでした。私共の会社は1938年に東京の調布で創業しましたが、石川先生のお住いも同じ調布にありました。そのようなご縁で、当社の三代前の社長であった私の父は、石川先生のお父上石川一郎様に戦前よりご面識を頂いておりました。後年、石川先生に品質管理でご指導を頂き、二世代にわたりご高配を賜ったことになります。

石川先生に温かく、厳しくご指導頂いた品質管理は、当社に世界各国のお客様に製品をご愛用頂き、会社が発展するという大きな成果をもたらしました。

先生にご指導頂く時、私は品質管理の世界的大家に対する畏敬の念からの緊張感と、「女性化粧品は大体プッシュ商品で、デパートに美容部員を置いて、お客さんが来たらとっつかまえて、似合う、似合うと言って売ってしまうんです」というような表現をされる先生への親近感が混在した、自分でも説明のつかない気持ちになるのが常でした。

「新製品開発が予定通りの期間にでき、立上がりもうまくいって、一週間くらいで直行率が95%までいき、発売したらどんどん売れて、クレームもほとんどない、そういう会社になったら、品質管理は一人前」とのお言葉は、製造業に従事する企業人として常に胆に銘じております。

日本の品質管理は陽明学と似ており、知行合一の実学であると思います。その品質管理の理論を平易に指導し、QCサークルのような幅広い活動にまで展開された基本に、石川先生の人類愛のようなものを感じられた方は多いことと思います。

今でも、石川先生がお医者さんの往診カバンのようなあの黒いカバンをお持ちになって、ちょっと背を丸くされた例の姿勢で、スタスタと歩いてこられるような気がしてなりません。

(JUKI 取締役社長)

会議の司会と同時にもう一つの仕事

赤 尾 洋 二

目を瞑むると重いカバンを下げて歩かれる石川先生のお姿が目には浮かびます。重いカバンに何が入っているのか大変関心がありました。酔ったとき、その勢いで聞きすると、もちろん先生も酔っておられたので見せて下さいました。処理しなければならない多数の書類や手紙、鋏、糊などの七つ道具、常備薬、新聞、雑誌、およそない物はないので感心しました。日夜の休みない仕事、そしてノムニケーション、いつお仕事をされるのかの秘密はここに 있습니다。

先生は会議の司会をされながら同時にもう一つの仕事をされておりました。手紙も書いておられました。原稿も書かれ、このようにして初めてあれだけの超人的な仕事を残されたのだと思います。カバンの中にいつでもどこでも仕事ができる物が入っていたのです。私も一度試してみたのですが、疲労がひどく、とても真似できることではありませんでした。カバンと中身を真似ていたため、酔ったとき先生のカバンを間違えて家に持って帰ってしまったことがあります。冷汗が出ました。もっとも先生も私のカバンを持って帰っておられました。こんなミスをしたのは私くらいかも知れません。

先生は、電車では必ず新聞を読まれます。「新聞は必ずすみからすみまで読めよ」とおっしゃっておられました。これが先生が常識を持たれ、すべてに通じておられた所以だと思います。先生の語録に“QC 技術者の資格条件”として1. 常識を持つこと、2. 上司を使えること、3. 酒が飲めること、があります。1と2は駄目なので、3に徹して十二指腸潰瘍になってしまいました。幸い数年で回復し、ノムニケーションを通じあらゆる面でご指導をいただきました。

私の処女論文も、先生が7BCの3カ月目の研究を森口先生と共に引き出して下さったお陰です。圧縮限界の学位論文も、そのキッカケはやはり先生によるものでした。先生が最も力を入れられた著書の一つ『管理図法』の完成に、7BC同期生の吉川氏と協力させていただけたのは幸いでした。「貴様ら2人でこの本の計算を全部チェックしろ」と命令を受け、懸命にチェックしたのを思い出します。先生はご自分のQC指導会で、ノートにせっせとメモをとっておられました。これは相手が言ったことよりも、そのとき浮かんだご自分の考えをメモしておられたのでした。それをまとめたものが『管理図法』です。先生の文章のなかで時々つながりにくい句が見えるのは、そのためです。それだけ他に類が見られない先生独自のものとなっています。

先生は『品質管理』誌編集委員会や品質月間委員会などを通じて、現在行われている多くのQC活動を提案あるいは主導されてこられました。QCサークルの生みの親であることは申すまでもありません。

一昨年、ブラジルでの国際QC会議で、亡くなられたはずの先生のお声が聞こえてきました。人だかりのほうへ行ってみますと、ビデオで先生が講義をしておられました。世界50数カ国に先生の教えがひろがっているのを目のあたりに見て感動した次第です。先生の残された偉大な足跡を汚すことなく、日本的TQCの継承と発展に努めることがわれわれに課せられた使命であると、改めて感じさせられました。

(玉川大学教授 工学部経営工学科)

5.5 趣 味

先生は、ゴルフの他にも、いろいろと趣味をお持ちでいらっしゃった。本書で、パチンコについては第3章2節で朝香鐵一先生が、写真については第6章1節掲載の石川六郎氏が、ドライブについては、第6章3節での黒川裕子さんが、また麻雀については、第4章3節で朝尾正氏、第6章3節で黒川裕子氏、第13章2節で石井祐徳氏が触られています。一周忌に行われた偲ぶ会に先生がご自宅の庭の花を撮られた写真の作品が展示され、その素人離れした出来映えに参加者一同感嘆しましたが、その中から2点を136ページに掲載しました。